

子育て  
と  
美術

TEXTS

2013/9/9»14 AI-Gallery

# 青木 聖吾

## いつか見た記憶

子供のいない自分にとって子育てを考える事は今の自分にとって想像する事でしかないのですが、子育てというよりも子供だった自分自身の立場に置き換えて親と子の関係を逆説的に考えてみました。

度々私の作品に登場する親子のイメージは、潜在的な自分の両親に対する想いや記憶が作品のイメージに無意識に反映されているのかもしれませんが。幼い頃、確かに感じた両親の手の温もり、自身の成長と共に両親から受けた様々な記憶、全ての要素が重なり今の自分が形成されているのだろうか。一つ一つの小さな出来事も一見小さく見えても、その記憶に留められた要因が意識のフィルターに刷り込まれ、将来大きくその後の人生に影響する。

また、親子は結局の所、何らかの形で人生においても同じ事を繰り返す側面もあるのかもしれませんが。性格や外見が似るだけではなく、経験値においても全ての要因が繋がり一人の人間の人生を左右する。それはまさしく、らせん構造の如く繰り返される DNA の配列構造の様に、何らかの形で人生においても同じ事を

繰り返す側面もあるのかもしれませんが。

4年前に母が亡くなり、その闘病生活の折りに告白された様々な両親の真実。その時は、私自身も様々な個人的問題で揺れていて、今迄の自身の在り方を深く振り返っている時期でした。この時程、親子である事の因縁を深く感じた事は今迄ありません。何か目に見えない物理的な要素を越えた DNA レベルでの人生における繋がりを改めて感じました。

幼い頃の経験や記憶が、個人の感性の部分に大きく影響するのならば、もしかすると今の自分にとって作品を制作する事は、求めようとしても、求められない、失われていったものに対する証明、心の中の潜在的な喪失感を穴埋めする為の行為なのかもしれません。その極めて個人的な営みの中から対外的な関わりが生まれ、作品は自立して行きます。それはまるで一人の人間の成長過程に例えられそうです。子育てを考える事は、自分と両親との関係や距離を認識する事なのかもしれません。

あおき・せいご

1964年生まれ。93年愛知県立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。94年同大学院美術研究科絵画専攻研修科修了。赤青緑、○△□等のシンプルな構成要素をエレメントとして、世界の在り方を探る。高校で教える。今は独身。

# 稲垣 立男

## 子育てと美術

私の制作は、美術や美術がテーマとするものをあえて捉え直すようなアプローチなので、「美術とはこういうものだ」と固定することをせず、美術の領域をいつもぼんやりと眺めている。そのスタンスを子供の教育に絡めることは、ちょっと厄介ではある。

10歳の男の子をともに美術関係者である夫婦で育てており、家族でアーティスト・イン・レジデンスに長期滞在することもあり、また海外の国際展の取材などには年中連れ回されてもいる。ヨチヨチ歩きの頃から実験台として様々なワークショップにも参加させられ「アートのがんが育つんじゃないか？」とまわりから言われていたが、本人はもう飽き飽きで「アートはもう嫌だ」と言っている。私としては「ああ、やっぱり」とニヤニヤとしている。

美術に対する姿勢同様、立派なお父さんを目指すこともなく、その時の気分をストレートに子どもにぶつけるようなこともあってあまり感心はできない親である。昨年から今年にかけてのロンドン滞在中には、一緒にあちこちのワークショップや習い事に参加して、同じテーマで作品を作ったり、楽器を演奏したり、学校の宿題をコラボで取り組んだりしていた。これも教育的配慮というより習いごとをたくさんすることがテーマの私のロンドン滞在中のプロジェクトにちょっと付

き合ってもらっただけという気がしないでもない。

子どもとの関わる際に、私の父を参考にしているところはたぶんあると思う。父は2年前に亡くなったが、葬儀の際に喪主として挨拶しなければならず、はっと思い出したのが野球のバット作りだった。私が5歳の頃、父に野球のバットを買ってくれるようにせがんだのだが、父は近所の空き地で丸太を拾ってきて、のみでさっと削って簡単なバットを作った。ただの丸い棒を削った簡素なもので、私はそのバットが気に入らず、結局は近所のスポーツ店で新品のバットを買ってもらうことになった。

結局私は、スポーツ店の新品のバットではなく、人からあまり褒めてもらえないバットのようなものを作る仕事を選択したわけで、それは父から絶大な影響を受けたといえるのかもしれないし、息子とのコラボのアイディアとも少しは重なるような気もしている。小さい頃にはよくわからなかったが、あえてオルタナティブな選択をするという発想は、なかなかいいなあとは今では思っている。

それが今後の子育てについてのヒントになるかということのところあまりピンとはこないし、美術に関してもまだまだわからないことだらけだ。

いながき・たつお

1962年生まれ。90年多摩美術大学大学院美術研究科修了。コミュニティとコミュニケーションをテーマとしたアートプロジェクトや未就学児の美術鑑賞教育、ワークショップに取り組んでいる。法政大学国際文化学部教授。1児の父。

# 河田 政樹

ぼくのじじょう 僕の事情 ジョン・レノン

かつてジョン・レノンは誕生した我が子が5歳になるまで、子育てに専念すべく音楽活動を休止した。高校生の時、ジョン・レノンの曲を飽きることなく聴いていた僕は、そんな彼の行動に驚きと好感を持ちながら、僕も子供を授かったらハウス・ハズバンドだと半ば夢見心地に憧れていた。けれども思春期が終わるにつれてジョン・レノンへの熱が冷めはじめると、夢から覚めるように憧れも薄れていった。

2011年、息子が生まれた。母子家庭で育った僕には父親像というものがほとんどない。あるとしてもそれはいつも借り物だった。それでも僕は、戸惑いながらも借り物の中に父親としてあるべき姿を探し求めた。そんな時ふと、薄れていた憧れとともにジョン・レノンが子育てに専念していたことを思い出した。

なぜジョン・レノンは音楽活動を休止してまで子育てに専念したのだろうか。前妻に生まれた子供との関係に挫折感を覚えたからか。それもあるかもしれない。けれども僕は、オノ・ヨーコとの間に生まれたショーンと日々向き合うことの中

で、時に鏡のようにショーンが映し返し示しただろう、父親としてのジョン・レノンを彼自身が見つめ受け止めるための、そしてジョン・レノンが自身の事情で子育てに専念したように、まだ幼いショーン自身にも言葉にならない事情があるということに気づき、それに耳を傾けなければいけないと感じ取ったからではないだろうか、と思う。

父親としてあるべき姿。借り物でしかない父親像。僕は探し求めるのをやめることにした。

思えば僕にとって作品をつくるということは、映し返されるいまだ何かとしか言いようのないものに向き合い、耳を傾け、それを受け入れながらつねに捉え直すことの営みだった。高校生の時に抱いたあの憧れは、いま目の前に現れていることとして、息子との暮らしの中で子育てと分け隔てることなく、作品をつくることへも僕を向かわせている。

かわだ・まさき

1973年生まれ。99年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。写真、絵画、彫刻、既製品など様々なものを同等に扱いながら展示を行う。大学生の時に知り合った女性と2007年に結婚。東日本大震災の直前に父になった。

# 早川 陽子

それはまるで、  
お腹のなかで金魚を飼っているようだった。  
すっかり大きくなったお腹は、  
金魚鉢のような丸さで、  
胎動は、  
水に跳ねる小さな魚を連想させた。  
なんともくすぐったい。

椅子に腰かけて机に向かったが、  
大きなお腹が邪魔をして机に手が届かない。  
仕方なく、  
お腹にスケッチブックを載せてみたら、  
意外と安定して描きやすかった。  
分厚いスケッチブックの向こうから、  
魚が跳ねるような、  
あるいは泡がはじけるような、  
水が湧き出てくるような感触が伝わってきて、  
それをなんとか描きとめられないかと、  
筆を進めた。

このドローイングは、  
そんな胎動の感触を頼りに描き始めたものだ。

それまでの私は、  
妊娠時特有の強い吐き気や腰痛に悩まされ、  
日常生活はもちろん制作も手がつかず、  
かなり塞ぎ込んでいた。  
だが、  
絵日記のつもりで気軽に始めたドローイングのお陰で、  
身体や環境の変化を一步引いたところから見つめられるようになり、  
心が鎮まっていった。

あれから子どもは生まれ、  
2歳を過ぎた。  
とうの昔にお腹のなかにはいないのだけれど  
ドローイングは続けている。  
休まない子育ての日々を、  
穏やかに見つめるために…。

はやかわ・ようこ  
1973年生まれ。99年多摩美術大学大学院美術研究科修了。  
個展等で発表活動を行う一方、幼児や児童を対象とした造形  
ワークショップ講師を務める。妊娠中には胎動ドローイング  
を始める。1児の母。

# mhR

## 中継していく

私淑した美術の師匠は「落とし前をつけないとね」とよく言った。彼との出会いは福島の山中だった。友人と三人で度々会っていた時期がある。彼には不遇な時期で、当時美術周縁部にいた私達だから気を許したのか美術に対する思いのたけをぶちまけていた。その対話は、直球、変化球、クセ球、豪速球と硬軟混ぜながら問いを投げ、絶妙な返答を待ち受けるキャッチボール。彼にとっては気晴らしだったろうが、私は特に、時々放られる父から子への教えめいた言葉に揺さぶられ、彼の仕事に関わりたくなり美術の内側に入った。あれは美術へいざなうワークショップだった。晩年、彼は美術館などで数々のワークショップを行っているが、シングルになってからの子育て、息子との対話が基にあると思っている。

出産した時に届いた職場からのファックスは今も手元にある。今後の企画展予定が並び、上司の意欲と子育てと美術の両立へ向けて餞が綴られていた。職場復帰すると「企画出して」と言われ、出したのは「美術と育児」美術家と子育てをめぐるものだった。しかし、この企画は実現しなかった。一年後、無期休館が唐突に発表されたのである。唐突の後始末をしたいと私は志願し、元上司と仲間に支えられ準備期間含め二年間、独立スペースを運営した。「落とし前をつけなけ

れば」今思えば必死すぎた日々。その間に娘は一歳から三歳になった。

NPO 活動に加わって十年余り、芸術家と児童館や保育園でワークショップを私はやってきた。2010 年から三歳未満の乳幼児と母親対象のワークショップを始めた。年齢月齢で発達に差がある乳幼児の動作や言葉を受け入れて、子どもに戻り母の気持ちもくみながらコミュニケーションの仲立ちをする。「児童館の平日午前中の利用者」ニーズと「少子化」「子育て支援」というキーワードのかけあわせで公的な資金調達もできたが、美術の外側でワークショップを定期的に行っていくには、効果や効能、機能、ネットワーク形成、コミュニケーション能力など獲得されるものを前もってあげなければならない。

師匠の年齢をすでに越えた。娘は十六歳。親離れは近い。名目付きの分配に頼り活動を維持する手続きをいったん止めて見つめ直したくなった。今は一人キャッチボールだが、師匠や上司から投げられ留めたボールを中継するために、受け取りやすいようにふんわりと投げるフォームを思い描いている。

えむ・えいち・あーる

村田早苗が 2001 年から使用する符丁。1965 年生まれ。東洋大学社会学部卒。出版、政府系シンクタンク等を経て齋藤記念川口現代美術館へ。東京電機大学理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師。一女あり。

# Akiko Yasuda

「子育て」とは“時間をかけて、継続的に、接し、見守り、対応し、責任を持つ”ことだと思ふから……

美術家として？ というよりも、私はどこにでもいる人だと思って生活をしています。

私の考える「子育て」は、“時間をかけて、継続的に、接し、見守り、対応し、責任を持つ”ことだと思ふから、今はできていないと思います。

少し「関わっているかな」と思えるのは、メキシコで2008年よりほぼ毎年行っているコミュニティアート“Muchas gracias de Mucha gente”です。街の広場にて赤ちゃんから大人まで自由に参加してもらい、1m<sup>2</sup>のコラージュを共同制作しています。

参加の仕方は興味を持った人が、家族で、ひとりで、友人同士で、子どもだけ、大人だけ、通りすがりにふらっと、と気軽にしてくれます。知らない人たちが一緒に肩を並べ、好きな色を選び制作すると、お互いの何かに興味を持ったり、発見したり、普段は接しない人たち同士での出会いがあります。参加者の大部分はある一日の出来事と、その後は記憶から消えてしまうことですが、継続して参加してくれる子も人もいます。楽しかったから、去年とは違った物を、色々な考え方を持って参加してくれるのだと思います。

なかでも路上でチューイングや土産物等の販売をしている子ども達がいるの

ですが、彼らは遠巻きにみているので、参加をうながすとはにかみながら近づき、制作を楽しみました。わたしたちは後日、街の図書館にて制作した作品とその活動時の写真を展示しますが、彼らは自分たちや友達の作った物を見つけあったり、写っている写真を見つけあったりして楽しんでいました。翌年は友達を連れて路上に座り込んで、夢中になって取り組んでいました。その後彼らとは、通りすがりの微笑み返しとたまに会話で、日に日に成長してく様子をお互いに確認しています。

今はひとりの子どもや子ども達を“育てる”形ではなく、普通のひととして（とはいってもここでは外国人ですので、浮世離れしているのは確かですが）コミュニケーションをとおして、こういう人もいるのだ、こういう考え方もあるのだ、と感じてもらえるように、話を聞いたり、会話をしたり、気にかけて、見守ったり、日常の生活の中で、考え方や、容姿など、空気感をとおして、不特定多数の子どもたちや人のいろんな“眼＝芽”が“育っていける”ような“関わり”を持っていたいと思います。

参考：[www.facebook.com/pages/Muchas-gracias-de-Mucha-gente/250140011741608?ref=ts&fref=ts](https://www.facebook.com/pages/Muchas-gracias-de-Mucha-gente/250140011741608?ref=ts&fref=ts)

あきこ・やすだ (安田 亜希子)

Textile artist. メキシコ在住。2008年よりサン・ミゲル・デ・アジェンデの広場でコミュニティアート活動を行う。階段壁に付着した埃を利用した「ホコリ高き壁サイ 23年の歴史を駆け抜ける」(2005年、埼玉県立近代美術館)は現在も清掃されず。独身。



# 八巻 香澄

わたしとあなたは違うということを知る場所で

美術は、作る人が作りっぱなしでそこに置いておいただけでは、意味がない。それを見たり聞いたり触ったりと関わりをもって、感じたり考えたりする人（鑑賞者）がいてナンボのものである。で、私はその美術と呼ばれるものと人との出会いをどうデザインするか考えるひと。

自分の仕事を言い表すのにじっくりくるなあと最近感じている言葉は「デリバリー」だ。英語の「deliver」には「配達する・届ける」とか、「(敵に)明け渡す・手放す」とか、「(束縛などから)自由にする」とか、「出産させる」とか、なんやかんや色んな意味があるらしい。多くの人に見てもらえるように展示をするということは、作家の生み出したものを鑑賞者の手に届けることだし、でもその作品をどう思うかという判断は鑑賞者に委ねられているので、明け渡すという感じもある。鑑賞者が作品に触れた結果、囚われていた固定観念から自由になるかもしれない。そして、作家が新しい作品を生み出すところに立ち会うこともある。

この「デリバリー」を、鑑賞者一人一人にとって有効なものにしたい。

それは展示空間の中で、作品と鑑賞者が向き合っている瞬間だけをドラマチックに演出すればいいというものではない。その場に足を運んでもらうための前振りの告知から、作品を見た後の余韻まで。もっと言えば、生まれて様々な色や形や素材に触れて経験値を上げていき、やがて「美術」と呼ばれるものに出合う過程や、数時間後、数日後、もしかしたら数年後に、作品の前で考えたことをふと反芻したり、それが自分の認識の枠組みを大きく変えてしまったことに気づいたりまでを含めての一連のプロセスが、私の考える「デリバリー」である。

何のために「デリバリー」するのか。つまりなぜ美術と向き合う必要があると考えるのかということだが、それは美術の素晴らしさに感動してもらうためでもなければ、感性を涵養するためでもない。私の答えは、市民社会におけるプレイヤーを育てるため、である。美術作品

には作家の価値観や考え方が表現されているけれども、美術鑑賞は作家の意図を読むことが正しい答えではない（作家には申し訳ないけど、作家の解釈も一つの意見だと思ってるから。だってほら、「明け渡す・手放す」だからさ）。だからこそ、作品や他の鑑賞者との間でアイディアの受け渡しをすることに意味がある。

近年、鑑賞教育業界では「対話による鑑賞」というプログラムが浸透してきている。目の前にある美術作品について、自分の感覚や認識を振り返って言語化し、また一方で他の人の言葉を聞くことで、多様な考え方・多様な価値観があることを理解する方法である。対話のセッションは無理やり合意を作るために行うものではない。それぞれの感じ方・考え方を整理し尊重することで、一人一人が自己肯定感を持ち、自己と他者の関係をとらえなおすことができる。

「この絵、何が描かれてるのか全然分からないし、どういう意味なのかさっぱりなのよね」と悶々とした気持ちになっ

たり、一緒に見ている人と全く意見が合わなかったりしたら、儲けもの。そこから喰らいついて、異なる価値観を理解しようと努めることは、美術鑑賞に留まらず、この不安定な民主主義の日本社会において、あらゆる局面の対話のテーブルで不可欠な姿勢である。

だから、作品自体に社会や政治や経済に関するテーマを含んでいるかどうかはあまり関係なく、あらゆる美術作品の鑑賞が、私たち一人一人が生きていくためのプラクティスとなりうる。子どもも大人もお年寄りも、元気な人もそうでない人も、すべての人がプレイヤーとして生きていくために、美術を「デリバリー」していきたい。それは、子どもたちが育っていく未来に関わっていく作業だと信じてる。

わたしとあなたは違うということを知る場所で。

やまき・かすみ

1978年生まれ。2001年東京大学美学藝術学専修課程卒業。2006年より東京都庭園美術館に勤務し、現代美術やデザインの展覧会を担当。展覧会企画も教育プログラムも、コミュニケーションが最大の関心。一児の母。





「子育てと美術 TEXTS」 編集：mhr デザイン：小林義郎 発行：2013年9月1日